

変だという言葉の中に隠されている悪意 マルコによる福音書3:20~35 / 李正雨師

私たちは、毎週の礼拝が終わる前、ミャンマーのために祈っています。彼らが望んでいる民主と自由が彼らに与えられるように、独裁と軍部の政権が消え去るように、彼らと共に願って祈っています。現在、ミャンマーの軍部は、2020年の総選挙が不正選挙だと主張してクーデターを引き起こしました。そして、ミャンマーの政治を導いているウィンミン大統領とアウンサンスーチー国家顧問を捕まえ、国に緊急事態宣言を出しました。しかしミャンマーの国民は、クーデターの名目が正しくないとの理由で軍部政権に反対し、国の民主化のために抵抗しています。しかし、軍部は国民を弾圧して、彼らの精神的な支柱であるアウンサンスーチー顧問に多くの誤りと罪があると主張しています。過去にアウンサンスーチー顧問は、少数民族ロヒンギャ問題に沈黙し、政治活動のうちに賄賂、輸出法違反など様々な罪を犯したということです。しかし、多くの人々は、これがクーデターを隠すためのフェイクニュースだということを知っています。特定の人のあらいを探して、真実をゆがめることは、過去からあったことだからです。

今日の福音書でもこれと同じことが起こります。イエスさまの公的な生涯の主なお働きは、福音を伝えることと力のない者たちを助けてくださることでした。このようなことは、多くの人々から賞賛と支持を受けましたが、みんながイエスさまを支持するわけではありませんでした。このようなことを行う過程で、イエスさまは一部の人々から反感を買いました。特に当時の権力を握っていた者たちは、イエスさまが行なわれたことを好ましく思いませんでした。今日の福音書の前であるマルコによる福音書2章で起こったことだけを見ても、なぜイエスさまが彼らに反感を買ったかが分かります。まず、マルコによる福音書2章で、イエスさまは中風の人に、「あなたの罪は赦される」と言われました。律法学者たちはこのことは神を冒瀆することだと思いましたが、この言葉を聞いた中風の人が癒されると、その場に一緒にいた人々は、この癒しを見て神を賛美しました。二番目に、イエスさまは当時の人々に非難された徴税人をご自分の弟子として召され、彼らと共に食事をなさいました。このことも、律法学者たちによって指摘されましたが、イエスさまは「わたしが来たのは、正しい人を招くのではなく、罪人を招くためである」と言われました。三番目に、断食していない弟子たちを他の人が指摘しましたが、イエスさまは断食の必要性について言われ、新しいぶどう酒は新しい革袋に入れなければならないと言われました。最後に、ファリサイ派の人々から弟子たちが安息日の規則を守っていないと指摘されると、イエスさまは「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と言われました。

このようなことは、多くの人々に反響を呼び起こしました。おびたしい群衆がイエスさまに従って、イエスさまは彼らに福音を伝え、彼らの必要なことを満たしてくださいました。病人と悪霊に取りつかれた人々を癒され、汚れた霊どもはイエスさまと会うと、ひれ伏して「あなたは神の子だ」と叫びました。このことは、イエス様を目立たせて、イエスさまの福音は、権力者たちから反感を買いました。今日の福音書の前6節では、このように書かれています。「ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。」イエスさまはこのような状況の中でも、ご自分に与えられたことに最善を尽くされました。人々は分かれて、もっとイエスさまに従ったり、逆に遠ざかったりしました。今日の福音書は、このすべての状況を私たちに示しています。今日の福音書20~21節の御言葉です。「イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。」

イエスさまは食事なされる暇もなく、神さまのことを人々に伝えておられました。しかし、このようなイエスさまのご苦勞に感謝し、喜ぶ人だけがいるのではありませんでした。イエスさまに反対する人々もいました。彼らの中には、イエスさまの身内の人もおおり、エルサレムから下って来た律法学者たちもいました。エルサレムから来たというのは、権威ある者、力ある人が来たということです。彼らの目的は、イエスさまを取り押さえることでした。だから、彼らはイエスさまにとんでもないイメージを作って着せようとしていました。イエスさまの身内の人たちは、イエスは気が変になったと言いました(21節)。エルサレムから来た律法学

者たちは、イエスはベルゼブルに取りつかれていると言ひ、また、悪霊の頭の力で悪霊を追い出していると言ひました(22節)。変だという言葉を出して、イエスさまを取り押さえるためでした。

ところが、ここで一つ気になることがあります。律法学者の行動は理解できるとしても、なぜイエスさまの身内の人までも、イエスさまを取り押さえようとしたのでしょうか。本当にイエスさまが変になったのでしょうか。私はこの箇所を読んでいながら、ふとマルコによる福音書6章3節の言葉を思い出しました。「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。」この言葉は、イエスさまが故郷に行ったとき、ご自分の知り合いと親戚に言われたことです。そして、この言葉の終わりに「このように、人々はイエスにつまずいた」と書かれています。他の聖書写本には「と、イエスを排斥した」と書かれています。すなわち、イエスさまはご自分の親戚からメシアとして受け入れられず、排斥されたのです。それだけでなく、ここで、イエスさまは「大工、マリアの息子」と呼ばれています。当時のイスラエルにも身分制度が存在し、イエスをけなすために大工だと言われたことを考えると、大工という身分は尊重されていなかったようです。さらに、イエスさまはマリアの息子と呼ばれます。イエスさまの弟子たちがゼベダイの子ヤコブとヨハネ、アルファイの子ヤコブと呼ばれたことと比べると、母の名前が付けられて呼ばれるのは、一般的ではありません。私の考えでは、イエスさまの父であるヨセフが早く亡くなって、イエスさまの家が人々に認められず、無視されたようです。だから、イエスさまの親戚はイエスを軽んじて、前後を考えずに、イエスさまを取り押さえるために来たのだと思います。

するとイエスさまは、彼らの行動には何の名分もなく、あらを探して真実を隠そうとすることだと指摘なさいました。その指摘が23～27節の言葉です。イエスさまは、サタンがサタンを追い出せないのは、内輪で争えば、どんな国でも成り立たないからだとされます。そんなわけで、律法学者たちの主張は正しくありません。しかも、イエスさまは悪霊に取りつかれた人々を癒しておられます。それは、イエスさまの中に悪霊ではなく、悪霊が最も恐れている神の霊がおられるからです。しかし、エルサレムから下って来た律法学者たちは、イエスさまはベルゼブル、すなわち、悪霊の頭に取りつかれたと言ひました。この言葉は、イエスさまの中におられる神の霊を冒瀆することです。律法によると、神の霊を冒瀆した人々には、死刑が与えられます。旧約聖書でも出エジプト記34章、レビ記24章、民数記15章などには、神さまを冒瀆した人が受ける罰について書かれています。律法学者たちは、イエスさまを取り押さえるために悪魔に取りつかれたと言ひましたが、最終的に彼らは、神の霊を冒瀆したのです。神の霊を冒瀆するとどうなるかは、律法学者である彼らが詳しく知っているでしょう。

31～35節の言葉も、このような流れで読むと、理解ができると思います。イエスさまの母と兄弟たちが来て、人をうやめてイエスさまを呼びましたが、イエスさまは出て来られせん。そして、ご自分の周りに座っている人たちを見回されて「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と言われます。これは、イエスさまがご自分の家族を否定する言葉ではありません。イエスさまの周りに座っている人たちも、ご自分の家族だということです。イエスさまと血を分けたとしても、イエスさまの家族になるわけではありません。むしろ血を分けた親戚たちは、イエスさまは気が変になったと言って、イエスさまを取り押さえようとしてしました。ユダヤ人という血統が救いをもたらすのではないように、イエスさまと血を分けたからといって、自動的に救われるのでもありません。35節の御言葉のように、神さまの御心を行う人がイエスさまの家族になるのです。

最近、この世で起こっていることの中には、良くないことが多いです。ミャンマーだけでなく、パレスチナのガザ地区で起きた戦争によって数百人が殺されました。イスラエル軍とパレスチナのハマスは、宗教的な名分を出して戦争を起し、被害はガザ地区の市民に及びました。彼らはお互いに間違っている、変だと言っていますが、その中には悪意が隠されています。まるでイエスさまを取り押さえようとして来た律法学者たちのようにです。彼れら神の名によって起きたことが、果たして神の栄光になることでしょうか。自分の欲望のために悪意を持って、相手のあらを探して、真実を乱すこと。これこそ、聖霊を冒瀆することではないでしょうか。イエスさまはこの世でこのようなことと関わりました。イエスさまの家族になった私たちがこのようなことを見逃してはならないでしょう。神さまの義と平和がこの世の皆様に臨みますように。聖霊によって世の中のすべてのことが明らかになりますように、主の御名によって祈ります。